

バスケットボーイ

—— ピート・マラヴィッチの青春 ——

The
Pistol
The Birth of a Legend



● スタッフ ●

エグゼクティブ・プロデュース・監督/フランク・シュローダー 製作・脚本/ダリル・キャンベル 製作統括/ロドニー・ストーン・ピーター・アンドリュース
原案/ダリル・キャンベル、ピート・マラヴィッチ、フランク・シュローダー 音楽(作曲・指揮)/ブレント・ヘヴンズ
音楽監督/リック・ジャラード オリジナルソング/ミラージュ 撮影監督/ランディー・ウォルシュ

● キャスト ●

ヘレン・マラヴィッチ/ミリー・パーキンス プレス・マラヴィッチ/ニック・ベネディクト ピート・マラヴィッチ(ピストル)/アダム・ギア
バーン・ベンデルトン(コーチ)/ブーツ・ガーランド バディー・ベンデルトン/バディー・ベトリー カール・コンフィールド/ダリル・キャンベル
サンディー/ウェンディー・レブランク ムース/ジョン・リチャードソン

1990年/アメリカ映画/カラー/101分/ビスタサイズ/サラウンド 配給:株につかつ © LA Production Group, Inc.

財団法人・日本バスケットボール協会推薦



バスケットボール誕生100周年

バスケットボーイ

—— ピート・マラヴィッチの青春 ——

The Pistol
The Birth of a Legend

“夢をもち、
努力すれば、
必ず叶えられる”



●解説●

“ピストル”ピートに捧ぐ

●「バスケット・ボーイ」は有名なバスケットボール選手“ピストル”ピート・マラヴィッチの少年時代の物語である。彼はただ単にうまい選手であっただけではなく、バスケットのやり方そのものを変えてしまった。背中からのバックパス、両足の間でのドリブルなどトリッキーなプレイは観客を熱狂させずにはおかなかった。

●この映画は、マラヴィッチの企画によるもので、父プレスの死後間もなく、ダリル・キャンベル(脚本・製作)フランク・シュローダー(監督)のもとへ持ち込まれた。やがてキャンベルとシュローダーはマラヴィッチと共に彼の自叙伝「Heir To Dream」を書き上げた。

長い自叙伝の中でも少年時代の輝かしい日々——バスケット選手になる夢を捨ててはしないと決意したあの一年間を映画にしたいというのがマラヴィッチの強い希望であった。

●映画のシナリオも進み、「ピストル」役のオーディションも行われ、着々と準備が進む中、志半ばにしてピート・マラヴィッチは心臓病でこの世を去った。'88年1月5日、40歳だった。検死の結果、マラヴィッチはずっと心臓病を煩っていたことが明らかとなった。普通の患者なら20歳までしか生きられないという。人々はこの驚くべきスーパースターの死を悼むとともに、このチャンピオンの志と勇氣に感動した。

●“観る人に希望を与え、チャレンジすることの素晴らしさで胸をいっぱいさせるような映画を作りたい”と願ったマラヴィッチの遺志を継いで、キャンベルとシュローダーは'90年この映画を完成させた。

●撮影はすべてレイジアナの小さな町ハモンド、ポンチャトラでのロケーションで行われた。1960年という時代考証的要素もさることながら、その町の人々が貴重な要素となった。何百人ものエキストラがゲームの観客として参加し、彼らの熱狂こそが「ピストル」を甦らせた。

●“ピストル”を演じたアダム・ギアはピートが他界する1年前に300人余りの中から選ばれた少年の1人である。

●“ピストル”となるため、トレーナーとともに数ヶ月の間1日8時間の練習をこなした。ピートの目にかんって1年、アダムも“ピストル”となることで彼の役者となる夢を叶えたのである。

●ピートとプレスの二人の夢見屋さんの中において、ピートの子どもながらの無垢さを守ろうとする母親役には「アンネの日記」のアンネ役で知られるミリー・パークスがあたっている。

●ピートに夢を与えピートにとって尊敬すべき優しい父親、プレス役を演じたニック・ベネディクトは言う“まさしく自分自身の父親の姿を重ねることによってプレスの役を演じた”と。

●この映画はシュローダーとキャンベルがアメリカの伝説の男——ピート・マラヴィッチへの思い出と友情に捧げるものである。



推薦します

- 中村 知 元全日本男子バスケットボールチーム監督
- 結城 昭二 NHK解説委員/元オリンピック選手
- 井上 真一 名古屋短期大学付属高校バスケットボール部監督
- 共同石油バスケットボール部監督

—— アメリカン・ドリーム ——

●ストーリー●

“ピストル”の伝説は人々が心に希望を持っていた時代、1960年に始まる。

父から息子へ引き継がれた夢は、プロバスケットの選手になることであり、バスケットそのもののやり方を変えていくことでもあった。中学生のやせっぽちの少年にとってその夢は大きすぎて周囲から理解されなかった。そんな中でくじけずにいられたのはいつも、励まし支えてくれる父とボール、そして夢があったからである。

父プレスは、元プロバスケット選手で、大学でコーチをしている。少年ピートは5歳からバスケットを始め、いつもボールを持ち、家の中、道路、いたるところが彼の練習場所であった。ある日授業をぬけだし、一人体育館でシュート練習をしているところを高校のバスケットコーチ、バーンに認められる。高校生のチームで練習ができると喜び、興奮するピート、しかし中学生のピートはベンチで過ごす辛い日々が続いた。

待ちに待った初試合、ドリブルしながら様子を見る、ゴール下、ノーマークのコーチの息子であるパディーへ頭の後ろを通して素早いパスを送る。しかしそのパスボールはパディーの鼻に直撃してしまい、しかも試合にも負けてしまう。ピートの直感的判断によるトリッキーなプレイは、古い因習にとらわれているコーチはもちろんチームのメンバーたちにも受け入れられず、“サーカスにでも行け”と嘲られる。沈むピートの心を理解し、勇気づける父、ピートは涙をこらえ、父の夢——今や彼自身の夢を追う決意をする。

チャンスはやってきた。ガードの怪我により再び試合にでるピート。日頃の成果を生かし、次々とシュートを決め、素晴らしいパスを見せ、チームを勝利へと導いた。彼の鮮やかなプレイを地元の新聞は「ピストル」という名で報じた。

ある日、父プレスはバーンコーチに黒人チームの試合を見せた。それは、スピード、ジャンプ力とも白人のものとはケタ違いであった。“これがバスケットの未来だ。このチームに勝たずして州の優勝者とは言えない”とプレスは言った。

その後ピートの活躍でチームはサウス・カロライナ州で優勝した。試合の後、バーンコーチは黒人チームとの試合を提案した。パディーを中心にメンバーたちは偏見と無知さのためにその試合を激しく拒否した。その夜、パーティーでヒーローの座を奪われたパディーはピートに殴りかかった。パディーの言いなりにその場を立ち去るチームメイトたち……パディーの態度は目に余った。ピートはパディーの背に向かって叫んだ“大ばか野郎”。

二人は黒人チームと試合をするか、ピートが退部するかをかけて夜の体育館の対決に臨んだ——。

5月25日(土) 6月21日(金) 独占ロードショー

■特別鑑賞券絶賛発売中■
●一般 1,300円(当日、一般1,600円のところ)
●学生 1,000円(当日、大学1,300円、高・中1,200円のところ、小学1,000円)

(特別鑑賞券は、セゾン系劇場窓口、チケットセゾン、チケットぴあ有名プレイガイドにて取扱い中)

平日	12:55	3:00	5:05	7:10	
土曜日	12:25	2:30	4:35	7:10	9:15
日曜日	10:50	12:55	3:00	5:05	7:10

★土曜日(5/25・6/1・8・15)6:30より北原憲彦さん(元全日本バスケットボールチームキャプテン)を迎えトークショーを行います。“きっとバスケットが好きになる”

キネカ大森

JR大森駅東口・西友5F ☎03(3762)6000